

【氏名】 高松 雅文

【所属大学院】（助成決定時） 大阪大学大学院文学研究科

【研究題目】

国際関係からみた5～6世紀の日本と朝鮮半島
ー考古学的研究によってとらえた対外交渉ー

【研究の目的】

6世紀前半に活躍した継体天皇は応神天皇の5世孫とされ、滋賀県あるいは福井県の出身とされる。文献史料からうかがえる特異な出自や即位の経緯から、5世紀末に血統が絶えるとともに、政治的動乱に乗じて継体天皇が即位したという学説も提示されている。これまでは文献史料を用いて研究が進められてきたが、近年発掘調査の増加によって考古学的研究からも当時の政治変動を論じることが可能になりつつある。こうした研究動向をふまえて、当時の政治変動や継体天皇の支援勢力をとらえることを試みる。

さらに、上記の政治変動を反映する考古資料の多くは、祖形を朝鮮半島に求めることができ、やがて日本で製作されたことがわかる。よって、これらがもたらされた経緯や製作に関わる新たな技術の導入から、当時の交流のあり方やその変化、日本の政治変動との連動性を探ることができる。

本研究は、以上の2点について考古学的研究から迫ることを目的とする。

【研究の内容・方法】

まず継体天皇の政治動向を反映する考古資料を選定した。対象とした資料は、振り環頭大刀・広帯二山式冠・三葉文楕円形杏葉・f字形鏡板付轡・飾履などである。振り環頭大刀は伊勢神宮の神宝となっている玉纏太刀の祖形とされ、宝器としての性格をもつ。広帯二山式冠は、冠の上縁がカーブを描き、2つの山形となっている冠をさす。三葉文楕円形杏葉は植物の葉をデザインした楕円形の馬具飾り、f字形鏡板付轡は「へ」字をした頬当てが特徴的な轡である。飾履はきらびやかに飾られた靴をいう。これらはいずれも金銀で装飾されており、宝器的な性格を有していたと考えられる。

以上の遺物を対象として、出土地の分布傾向や古墳の規模について分析する。次に分布傾向と文献史料からうかがえる継体天皇関連地との対比を試みる。この対比に基づき、関連地と分布が重なる遺物をA群、そうではないものをB群としてまとめた。さらにA群を出土した古墳の形や規模から葬られた人物の階層について検討し、当時の政権運営のあり方・特質に迫った。

次に朝鮮半島からもたらされ、やがて日本で生産された冠や飾履について詳しく観察する。観察では製作技法、特に文様の施し方に着目した。この分析によって、半島からもたらされた段階と国産化の段階を区別するとともに、百済・新羅・伽耶・日本の技術交流を探る。これによって、それぞれの交流の実態を明らかにする。このほか奄美諸島や琉球諸島などで産する貝が半島にも流通していることに注目し、九州地域が独自に展開した交流とその特質にも迫る。

さいごに、半島では冠や飾履、帯金具が身分秩序を反映している点に注目する。特に新羅において、これらの品々の組み合わせと材質の違いによって序列が示されているが、日本ではこうした序列を認めることができない。この差異から政治制度の影響関係について検討し、制度整備の遅速について比較を行う。

【結論・考察】

対象資料のうち振り環頭大刀・広帯二山式冠・三葉文楕円形杏葉は、継体天皇関連地と重なるように分布することが判明した。これらは出土古墳の規模から新興の中小首長に配布されたと考えられる。一方でf字形鏡板付轡は大和を中心に広く分布し、大古墳からも多く出土することから、伝統的な有力氏族に配布されたといえる。さらに前者は天皇の側近的な性格をもちながら政治運営に従事した人物・集団で、後者は伝統的な勢力によって政治に大きな影響力を及ぼした有力氏族と結論づけた。

次に冠や飾履における文様の施し方では、日本では5世紀以来の手法を用いており、半島南部の伽耶と関係が深いのに対し、百済・新羅では異なる技法を採用していることが分かった。冠や飾履の形から日本と百済のつながりが示唆できるが、技術交流は伴わなかったと推測される。また、日本では冠・飾履を身分秩序に用いた形跡を認めがたく、政治制度の整備は半島より一歩遅れると想定することができた。